

■ 1) 情報交換 4点

▼「こどものまち」をやろうとしたきっかけ、動機

ミニミュンヘン、ミニさくらを知って、横浜でもやってみたいと思っていた。市の職員の中にも同じようなことを考えている人がいて、まずは勉強するところからはじめようと研究会をつくった。その後すぐに横浜市こども青少年局に事業提案し委託で行うことになった。まずは実験的に2日間だけ行ってみることになり実行した。

▼準備から参画している子どもたちは、58人、（年齢層別に）

58人

（内、大学生2名、高校生2名、中学生15名、小学生39名）

▼子どもたちを、どう集めるかへの工夫、悩み

応募は市の広報、開催区内の小中学校へのチラシ配布。あらゆる媒体でのPR。運営主体のI Loveつづきはこども向けのイベントも行っており、その参加者へのDMも。また応募があつてすぐにヒヤリングをしたことで、たとえば中学生ひとりにヒヤリングしたらその子が友達に話し、おもしろそうだからと運営市民が何倍にも増えていった。つながりがあった学校やコミスク、学童に声をかけたが、そういうグループ単位の参加へはまったくつながらなかった。最初に応募できてくれた人への説明&ヒヤリングを全員におこなったことが成功した。

▼より主体的に参画してもらうための工夫、悩み

最初のヒヤリングでこちらで用意できそうなこと、建物や予算などの関係で事実上できることとできないことを提示し、ワークの日までに組み立ててもらったり、同じようなことをしたいと思っている人同士の意見をそれぞれに伝えた。当日は「お店」「公共」「サービス」にまずはグループ分けし話しあった。その中で共通で決めること（お金の流れ、受付やハローワークの流れなど）はこどもたち全員で意見交換していた。あまり大人が言わなくても知らない間にそれぞれのパートの子どもが司会進行して進めていた。子どもに任せきりにしていたことで、強く進めていく子とそれに疎外感を持ってしまった子がいたので、そのフォローにあとから苦労した。